

ダンス・アウトリーチ活動の意義に関する調査

—豊橋市「学校アウトリーチ」を事例に—

豊永 洵子

Survey on the Significance of Dance Outreach Activities

—A Case of Toyohashi City School Outreach—

Junko TOYONAGA

1. はじめに

近年、公共劇場などで盛んにおこなわれるようになってきている地域連携事業として、アウトリーチという活動があげられる。アウトリーチとは、英語のreach outに由来することばであり、元々は芸術文化に触れることが困難な病院などの施設へ劇場空間が移動し提供するというものである(河島 2009)。近年日本においてもダンスを始め、音楽、演劇など様々なジャンルのアーティストがこのアウトリーチに参加している。

平成20年の学習指導要領改訂によって体育では「ダンス」領域において小学校から中学2年生まで男女共修化が行われた。これを受けて世間でも様々な分野で「ダンス必修化」が取り上げられたことは記憶に新しい。教員の援助という視点においても特にダンスについては外部講師の招聘がおこなわれる機会が同じ芸術分野といえる「美術」や「音楽」に比べ多いといえる。この理由として、一概には言えないものの、ダンスの専門家が学校に配置されないことによる、「教授の不安」を解消する一つの手立てでもあると考えられる。

一方で、アートマネジメントの視点でもこのアウトリーチ活動は注目されているといえる。特にコンテンポラリーダンスの分野において社会貢献としての意味でも多く活動が行われているといえるよう。本研究は、これらを踏まえダンス・アウトリーチ活動がより良い方向で教育と連携していく方法を考えるための先行調査として行った。

2. 先行研究の検討

1) ダンス・アウトリーチに関する研究動向

「アウトリーチ」という言葉を近年多く耳にする。しかしながら、研究分野において美術系、音楽系のアウトリーチについて述べられてはいるものの、ダンス・アウトリーチについては、「ダンス・ワークショップ」という体験参加型講座についての研究がほとんどである。このことから、ダンスの「アウトリーチ」について、日本においてほとんど一面的な研究しか進んでいない状況であることが示唆される。一方で、「ダンス・ワークショップ」に関する研究としては、ワークショップの進行役に焦点をあてたものが多く、安達・八木(2012)は、ダンス・ワークショップを通した効果的な学びを測定するために、アーティストのダンス観について調

査している。また、松岡 (2012) もワークショップを進行するアーティストの教育に対する考えを整理することから、ダンスワークショップの意義を見出している。更に、河合 (2016) も熟練進行者のインタビューとワークショップの参与観察より、ダンス・ワークショップの特徴を明らかにすることから、ダンス授業として学校教育に取り込む示唆を示している。また、原田 (2012) は創作体験に着目し、学習者の言説からワークショップの効果を測定している。

このように、ダンス・ワークショップの効果についての研究は、比較的注目されているものの、指導者や学習者への質的調査による研究が多いことが伺える。

2) アウトリーチ活動とは

河島 (2009) によるとアウトリーチとは「自らの助けを提供するために外に出ていくといったニュアンスの動詞を名詞化したもの」と述べており、近年のアートマネジメントや劇場運営において、地域貢献の一環としても非常に関心の高い活動であるといえる。学校という場における芸術文化教育と言えは「芸術鑑賞会」などを想像する。豊永 (2016) の研究結果からは、大学生の舞台鑑賞経験の多くにこの文化鑑賞会での経験が挙げられていることが明らかとなった。この「鑑賞」に重きを置いたプログラムとは異なり、アウトリーチではそれに留まらず、「子どもも大人も積極的に参加する、アーティストとの交流も含めた形態のプロジェクト (河島 2009, p.82)」と定義されている。したがって、学校単位で劇場を訪れるという形式に留まらず、アーティストが来校し、演奏だけでなく簡易なワークショップを行う事が多い。また、アウトリーチが全国に広がった一番の理由として1996年以降実施されてきた「ゆとり」の方針から新設された「総合的な学習」等の教育政策がある (山田, 2009) と言われており、従来なかった「ゆとり」の時間にアーティストを招き普段の学習とは異なる体験をさせるという活動が盛んに行われたことが挙げられる。

こうした背景の中、アウトリーチが行われる為に、劇場等の文化施設をはじめ、NPO等様々な団体が提供元となっている。しかしながら、最終的にサービスとして提供するのにはアーティスト個人となることから、芸術文化創造において内にもりがちなアーティストが社会という開かれた場で活動する機会となっていると考えられる。これにより、アーティスト自身が「内輪の趣味の活動を社会活動として再構築する (河島 2009, p.83)」機会となると期待されている。

3. 研究方法

1) 豊橋芸術劇場PLAT学校アウトリーチにおける調査

本研究では平成24年より愛知県豊橋市にある豊橋芸術劇場PLATが「文化体験事業」という位置づけで行っている「学校アウトリーチ」について、アンケート調査を用い、学校教員の視点から見たダンス・アウトリーチの印象について調査を行った。研究対象とした事例は、3年間継続して行われている特別支援学級の合同学習会を対象に行った。この会は豊橋市にある4つの小・中学校の特別支援学級に通う児童生徒が、PLATの主ホール舞台上を会場としてダンス・ワークショップを行うというアウトリーチである。講師は、東京を中心に国内外で活動するダンスカンパニーに所属しており、ダンスによるワークショップやアウトリーチ活動における経験が豊富である講師Aと同カンパニー所属のアシスタントB、愛知県内でフリーランスで活動するCが担当した。講師Aは、この特別支援学級に向けたアウトリーチの講師を3年間

連続して担当しており、継続して受講している子供たちや教員にとってなじみのある講師であり、受講者の中には受講を楽しみに待っている児童・生徒もいるという事であった。

アウトリーチの開催にあたって、事前に学校側のとりまとめ教員とPLATの劇場職員との打ち合わせの元、時間配分、休憩の取り方、物理的に支援が必要な子どもの人数などは把握している。講師はこの情報を基に当日の流れを事前に決定を行っている。

引率教員向けに簡単なアンケートは、参加型のダンス・ワークショップ終了後に行った。アンケート内容は、基本情報、教員のアウトリーチへの参加経験、本ワークショップについての満足度、子どもたちの様子、今後のアウトリーチの受け入れについて簡単なアンケート調査を用いて調査を行った。(表1)

表1. アンケート

所属校	お名前
専門教科について (以下当てはまるものに○をご記入ください)	
国語 ・ 算数(数学) ・ 理科 ・ 社会 ・ 音楽 ・ 美術 ・ 保健体育	
1. アウトリーチ(ワークショップ)への参加経験	
あり (回) ・ 今回が初めて	
2. (「あり」と答えた方) これまでに参加したアウトリーチ(ワークショップ)はどのようなジャンルのものでしたか?	
音楽 ・ 演劇 ・ 身体表現(ダンス) ・ 美術 ・ その他 ()	
3. 本日のワークショップについて当てはまるものに○をつけてください。	
(1) 全体的な感想について	
非常に満足 ・ 満足 ・ ふつう ・ 不満足 ・ 大変不満足	
(2) 講師の指導方法(ファシリテート)について	
非常に満足 ・ 満足 ・ ふつう ・ 不満足 ・ 大変不満足	
(3) 内容について	
非常に満足 ・ 満足 ・ ふつう ・ 不満足 ・ 大変不満足	
(4) 印象に残った内容や場面があればお書きください。	
(5) ワークショップ前後の子ども達の様子について	
大きな変化があった ・ 変化があった ・ あまり変化が見られなかった	
(6) 子どもたちの様子について、可能な範囲で具体的な様子をお書きください。	
(7) 今日のワークショップの内容で、今後の教育活動の中で参考になりそうなものや取り入れてみたいものはありましたか?	
はい ・ いいえ	
4. 今後、劇場で子どもたちのワークショップがあれば参加したいですか?	
はい ・ 違うジャンルのものであれば参加したい ・ いいえ	
5. 学校への出前ワークショップを受け入れたいと思いますか?	
はい ・ 違う内容のもので受け入れたい ・ いいえ	

2) ワークショップ内容の概要

本ワークショップは、約90分で構成された。受講者はあらかじめ「ダンスネーム」という名前を各々考え、養生テープに書き体操服の見える部分に貼っている。ダンスネームは、講師独自の方法であり、ニックネームでなくても、受講者自身が呼ばれたい名前を自由に選択するこ

とができる。また、教員や講師も全員「ダンスネーム」で参加する。講師紹介が終わると、講師Aは「あいさつ」を使った模倣遊びを始め、同じ模倣遊びから、「ダンスネーム」を使った動きの模倣遊びへと展開していく。講師は、近くに寄ってくる子どもだけでなく、離れていく子どもへも近寄り、輪の中に自然に入れるきっかけづくりを行った。全員が模倣することに慣れてきた状態から、リズムに合わせた模倣遊びへと変化した。使用楽曲は「手のひらを太陽に」など子どもたちがよく知っているものを使用し、また、歌詞に合わせた即興的な動きを受講者

表2. ワークショップの流れ

時間	内容
0' 00"	挨拶ムーブメント 「おはようございます」「こんにちは」等のあいさつを使ってポーズ 即興的なポーズを真似していく ↓ 場所(空間)を移動しながら続ける
0' 05"	ダンスネームで動きづくり 子どもたちのダンスネームや、その時の動きを駆使しながら、即興的に名前を使ったムーブメントを生み出す。 子ども達は、これを真似する。
0' 15"	音楽(リズム系)をかけて踊る
0' 35"	《休憩》
0' 45"	ダンスネームを使って自己紹介 先生たちが即興で自己紹介ムーブメントを行う ↓ 子どもたちが1人ずつ行う(終了した順に大きな円周上に並ばせる)
1' 10"	円形遊び 全員で手をつなぎ、大きな円を作る。 講師のリードのもと、円のままいろいろな動きを行う
1' 15"	2人組のワーク ・目をつぶった友達をリードして移動させる ・2人で手をつなぎ、友達グループとくぐったり、くぐられたりする ↓ グループ同士を合体させていき、大きな円に戻る
1' 25"	講師の言葉のリードで、座ったまま体のいろんな部分を動かす(即興) ↓ 円の中心で自由即興 ※講師3名から始まり、友達にタッチすることで入れ替わる ↓ いろいろな音にも合わせてみる(即興)
1' 35"	全員でアップテンポの曲に載せて自由に踊る
1' 40"	寝転がって脱力する (この時に演出として緞帳が上がる)
1' 45"	客席に下りて、あいさつとまとめ

は模倣する。前半は、ほとんど講師のリードの元、模倣することがだんだんとダンスになっていくプロセスを楽しむことに焦点が当てられた。

後半は、前半で行った「ダンスネーム」を使って自分で自分の動きを作り出すということに挑戦させた。この導入として、講師とアシスタント、引率教員がまず1人ずつ手本を即興的にみせ、子どもたちの関心を高めた。子どもたちは順に手を挙げ発表する。1人での発表を嫌がったり、難しがったりした場合には複数人で一緒に行う。

展開の2つ目に複数人で移動する活動から互いに真似っこしあい、自由に動きを作っていくという活動を行なった。

最後は、舞台の緞帳（幕）を挙げ先ほどとは異なる空間を楽しみながら、好きな場所で音楽と共に1日を振り返った。

4. 結果・考察

1) アウトリーチ参加についての満足度より

アウトリーチの満足度について「全体的な感想」「講師の指導力」「ワークショップの内容」の3つの項目について非常に満足、満足、ふつう、不満足、大変不満足の5つの項目にマーク式での回答を行った。表2より、「不満足」「大変不満足」というマイナス因子に関する回答は0件であり、全ての項目に関して回答者全員が普通以上の満足度であったことが明らかとなった。

表3. 満足度に関するアンケート結果

	非常に満足	満足	普通	不満足	大変不満足
全体的な感想	7	7	0	0	0
講師の指導力	8	6	0	0	0
内容	8	5	1	0	0

また、基礎情報のアンケート結果から、引率教員のほとんどが1回以上のアウトリーチ参加経験があることが分かっており、導入として比較的好意的な立場での参加であったのではないかと考えられた。（図1）

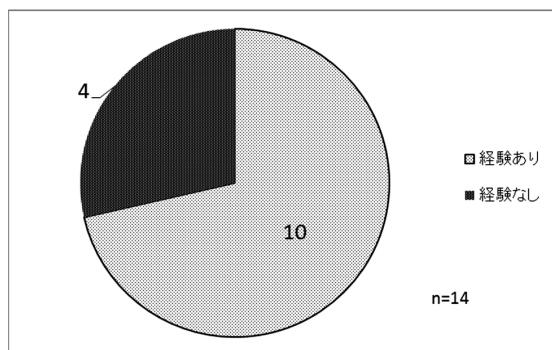


図1. 教員のワークショップ参加経験

2) 子どもたちの様子についてのアンケート調査から

次に、ワークショップを受けた子供の様子をみた感想について、記述形式での回答を行った。「子どもの変化が見られたか」という質問項目に関して、無回答を除く回答結果から9割が子ども達に何らかの変化が見られたと回答した。記述回答の内容を表3に示す。

回答結果から2パターンの変化が見られた。1つ目は「普段の様子との差異」、2つ目は「ワークショップ前半と後半での差異」である。

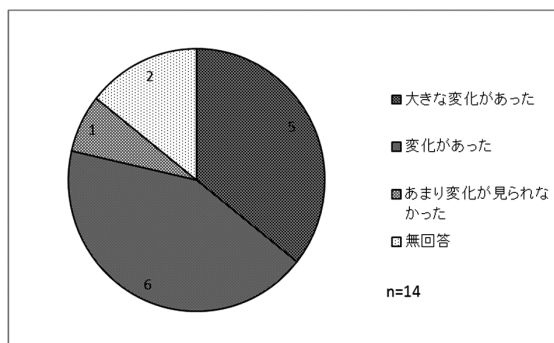


図2. 子どもたちの変化について

表4. 子どもの様子についての記述回答

	記述回答
1	はじめのうちはやる気のなかった子が、後半の活動くらいからだんだん楽しく参加できるようになった。
2	・音に反応できる子は楽しそうだった。 ・中学生なので、恥ずかしさのある子がいて、参加させたいがどう声をかけようか難しかった。「恥ずかしがらなくていいよ」と始めに行ってもらってもよかったのかも。
3	いつも積極的になれない児童も自然に解放さ、積極的になれたこと
4	・自己紹介が嫌だった子が、笑顔で動いていたこと ・最初はノリノリだった子が、踊るのが怖い(曲が怖かった)となった。
5	とても楽しそうだった。自分からいけない子も、曲が流れると動ける姿にびっくりしました。
6	子ども達に言葉で説明してもわからないことが多々あるが、ダンスや表現で説明(まね)をすると、すんなり分かりやすい(分かる)ところがあるなと気づけました。
7	前半1人では踊れていない子も、後半は友達と連なって踊り、心がほぐれてきたようです。
8	いつもは体を動かす量が少ない子たちが全身を使って表現をしているところ
9	楽しい活動をした後なので、表情がよく、気持ちも前向きになったと思います。運動量も確保されているので、体力もつき、とても子供たちにとって有意義な時間となりました。
10	普通だと自分の想いを伝えられない子が手を挙げ、前に出ていた。
11	無回答
12	最初動きがない子も、最後は楽しんでた。
13	無回答
14	笑顔をほとんど見たことがない子の顔が、柔らかくなっていた。

まず、「普段の様子との差異」について「いつも積極的になれない児童も自然に解放され、積極的になれたこと」「笑顔をほとんど見たことがない子の顔が、柔らかくなっていた。」という回答にあるように、身体と心をほぐしていく活動は、自然と子どもたちの積極性や主体的に楽しむ姿を引き出していたのではないかと考えられる。

次に「ワークショップ前半と後半での差異」について、記述内容からは「後半は（中略）心がほぐれてきたようです」や「後半の活動くらいからだんだん楽しく参加できるようになった。」といった、ワークショップ前半から後半にかけて、子どもたちに起こった変化についての記述が多く見られた。これについては、継続して行ってきたアウトリーチではあるものの、年1回の開催であり、日常の場所とは離れた空間での活動に「緊張」や「不安」等の心理的要素が影響して、動きが小さくなってしまったり、うまく活動に参加できなかったりと言って児童・生徒がいたのではないかと考えられる。しかしながら、日常とは異なる空間での活動は、子どもたちの枠を広げ、教員が今まで見たこともない姿を見ることができるともつながっていたとも考えられる。

また、今回の参加者が特別支援学級に通う子ども達は、様々な理由で他者と上手に遊べなかったり、または身体的に通常学級の子も達とうまく関われなかったりしていると予測され、体力づくりの1つである「遊び」の場面でも時間や量を充実させることが難しいと考えられる。このような背景が関係しているのか、運動量や体力的な部分に関する記述も見られた。もう一点、やはり「中学生」という発達段階が「恥ずかしさ」に影響があると考えられ、中学校の引率教員から見た子供たちの様子に恥ずかしさに関する記述が多くみられ、小学校の引率教員からは、子供たちの心や体がほぐれだんだん楽しそうになっているという記述が多く見られたことも特徴のひとつであった。

3) 印象に残った内容についての記述から

内容全般の満足度については全回答者が「満足」以上の回答をした。特に印象に残った場面について記述形式で回答を得た。結果は表5に示した。

表5. 印象に残った内容の記述回答

印象に残った事(記述)	
1	指導者の素晴らしい動きや表現に子どもたちがつられて自然に楽しそうに動いている様子
2	動きだけでなく、1度寝の時間があつたのがよかった。幕が開いて「ワー」という驚きやメリハリになった。
3	あまり制約がなく、あくまでも自由で(難しくない)であること。 指導的なことがないことがよかった(かも)と思います。
4	あいさつ、自己紹介、自然にダンスに入らせてくれたところ
5	1人1人の子どもの自己紹介の仕方 ダンスネームをつけてニックネームで呼ぶ事
6	無回答
7	かぼちゃダンス楽しかった
8	子どもが進んで手を挙げて表現するところ
9	生徒のダンスネームを使いながら、体全体を使って表現する活動が印象に残りました。

10	講師 A が全体指示をする中で、みんなが集まってくるのを見て毎年実施している成果が出ているなあと感じた。
11	無回答
12	どんな子供にも愛情を持って接しているところ(しつこく迫ってくる子、ポーっとしている子など)
13	子ども達に対し、上手に声かけをしてくれる。子どもたちの中で恥ずかしがっている子も最後は輪の中に入って踊っていた。とても楽しそうな表情であった。
14	子ども達をおおらかに受け入れてくださったところ

回答の内容からは「講師の対応の仕方・講習の方法」「内容自体について」「子どもたちの様子」の3つに分類できる。この中で、「講師の対応の仕方・公衆の手法」についてがよく見られ、教員自身が、指導方法や進行方法について高い確率で注目していたのではないかと考えられる。これについては「今後の教育活動の中で参考になりそうなものや取り入れてみたいものはありましたか」という質問項目に対し、回答者全員が「はい」と答えたことから明らかである。ここから、普段、指導の中心にいつ教員が、同じ学習者を客観的にみながら、別の指導者の指導法を観察するということが、教員自身の学びにつながる可能性を示唆できる。

4) 今後の取り組み意志について

「今後、劇場で子ども達のワークショップがあれば参加したいですか」の質問項目に対して、「はい」と答えたものが11名、「違うジャンルのものなら」が3名という結果となった。

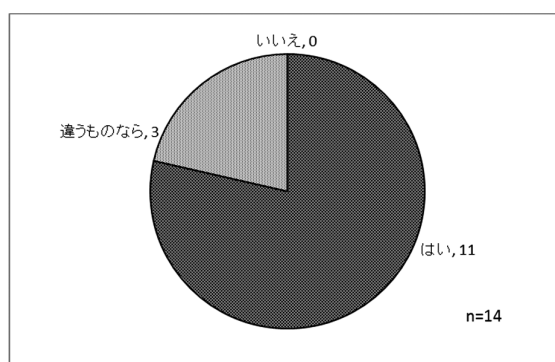


図3. 今後の参加意思について

「違うものなら」という回答であったものについて、特に共通した回答傾向は見られなかったため、様々なものにまんべんなく触れさせたいという気持ちの表れなのではないかということが覗えた。

また、「学校への出前ワークショップを受け入れたいと思いますか」という質問項目に関しては、ほとんどが好意的な回答ではあったものの、受け入れについて否定的な意見も見ることができた。ここから、現実的に現場に取り入れてくためには、時間や教室の確保やそれに関する打ち合わせなどが通常の業務にプラスされることが予測され、現実的ではないとも考えざるを

得ないことを安易に推測することができる。また、「受け入れたい」と回答しているものの、学校の規模から十分な場所の確保が難しいという意見も余白に記載されているなどからも、学校にアーティストが出向くのか、児童・生徒が劇場に出向くのかという点には、多くの問題が内在していることが示唆された。

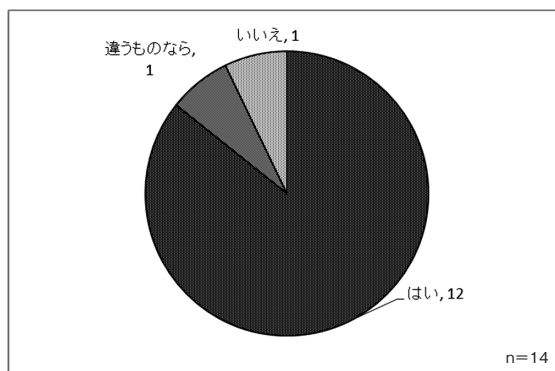


図4. ワークショップの受け入れに関する項目

5. まとめ

本研究では、学校アウトリーチの意義や役割について明確にしていくための段階的調査として、豊橋市の事例を調査対象とし、アンケートから現場の声を聞き取った。

文献研究からは、ダンスにおいて「アウトリーチ」というものが体験型の「ワークショップ」に留まっており、名称が異なるが内容に関しては「アウトリーチ」ならではの特徴を見出すまでに至っていないことが明らかになった。また、ダンス・ワークショップについての先行研究はいくつかみられることから、「体験すること」「鑑賞すること」双方の良さを組み合わせた内容の提供なども考えていくべき課題であることが推察された。

アンケート調査からは、活動の中で子どもたちの変容を見ることができていることが明らかとなった。本活動は90分という長時間の活動であったことから、前半・後半での変化もより見えやすかったと考えられる。しかしながら、実際に学校アウトリーチで行っている場合を想定すると、45分から50分の授業時間内に完結せねばならず、短時間での変容を見ることは難しいのではないかということが推察された。

また、参加した教員のほぼ全員が活動に関して満足していることが明らかとなった。更にその満足の理由としては、「講師の対応の仕方・講習の方法」「内容自体について」「子どもたちの様子」の3つを抽出することができた。ここから、アウトリーチとして講師主導の下、子ども達と一緒に楽しんだり、体験することは、教員の学びにもつながっているのではないかということが推察された。

本調査は、予備調査的に行ったが、実際の教員がアウトリーチという学外事業にどのような印象を持っているのかということを示すべく、少なからず垣間見ることができた。「アウトリーチ活動が育ちつつある現在であるからこそ、本当に文化政策の目標達成に資するよう、その具体的課題を検討しておく必要がある（河島 2009, p.82）」と述べられているように、現段階において

しばしば目的なく進められている場合があることも推察に易い。ダンスに関するワークショップ等については、肯定的な側面を多く持っており、受講者の多くは日常では味わえない何かを楽しむことができていると考える。であるからこそ今後、「教育」という側面からもこのアウトリーチという活動の意義を考えていく必要があると言えよう。

謝 辞

本調査において、学校との調整を行っていただいた、穂の国とよはし芸術劇場PLAT上栗様、高田様、塩見様、また、研究に参加していただいた先生方に感謝申し上げます。

《引用文献》

- 1) 河島伸子 (2009) アウトリーチ再考—アーツ・マネジメントにおける近年の動向—。都市問題研究61-10, pp.81-94
- 2) 河合史菜 (2016) 小学生を対象としたダンス・ワークショップに関する一考察—進行者に着目して—, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集3 (2), 3
- 3) 原田純子 (2012) ダンス・ワークショップにおける学びについての—考察—創作体験とグループ活動の意味—, 日本女子体育連盟学術研究28, pp.17-29
- 4) 山田真一 (2009) 美術と実演芸術のアウトリーチ活動の比較考察, 横浜美術短期大学教育・研究紀要4, pp.101-105
- 5) 松岡綾葉 (2012) アーティストによる学校ダンス教育:「ダンス教育ラボ」における言説から, こども教育宝仙大学紀要8, pp.75-84
- 6) 安達詩穂・八木ありさ (2017) コンテンポラリー・ダンスを専門としたアーティストのダンス観が児童を対象としたダンス・ワークショップへ与える影響, 日本女子体育大学紀要47, pp.25-37